

あなたに出逢えてよかった

～ 介護のやりがい事例集 Vol.1～



医療生協さいたま生活協同組合

●わたしも、あなたの笑顔が大好きでした

老人保健施設さんと 通所リハビリテーション

介護福祉士

佐藤 あゆみ

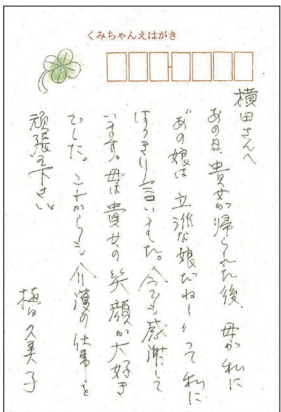


介護福祉士として仕事を初めてから10年が経ちました。これまでたくさんの方と出会い、たくさんの方の経験をさせてもらいました。その中で、私には忘れられない出会いがあります。100歳を超えた女性の利用者さん（Oさん）です。娘さんが、よく面会にみえていました。Oさんと関わっていく中で、何かあると「横田さん。」（旧姓）と、私のことを呼んでもらえるようになり、娘さんともお話する機会が増えていきました。

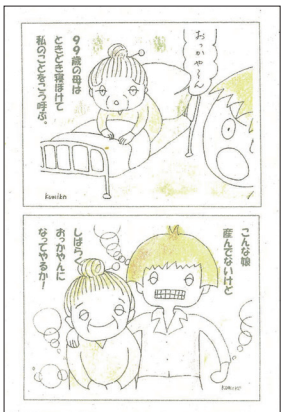
半袖のTシャツで仕事をしている私を見かけたOさんは「こんなに腕出して…冷やしちゃダメだよ!!」と、ご自分のひざ掛けて私の腕を包み、暖めてくれるやさしい人でした。心配性で時々不安になってしまつこともありましたが、その都度声を掛け、話を聞いているなかで、ある日から「横田さんがそう言つたらそうする!」と言ってもらえるようになり、娘さんともお話をすることができました。

そんな中、Oさんとお別れの日が来てしまいました。私が夜勤をしていた日、夜中にOさんの状態が悪くなり、娘さんに連絡し、看護師と一緒に病院へ向かいました。受診後、施設に戻ってきたものの、症状は良くなり、看護師から、死期が近いことの報告を受けました。

それからOさんは個室で過ごすことになりました。私は勤務時間後に、何度かOさんの部屋に伺いました。娘さんから「横田さんが夜勤の日でよかった。」と仰つて



いただきました。別の日には、「さっきから横田さん、横田さん」て、呼ぶんですよ」と話してくれ、Oさんに声をかけると「横田さん、横田さん。」と名前を呼びながら、手をぎゅっと握ってくれました。今、泣いてしまつのは良くないと思いながらも、涙が止まりませんでした。ずっと側に居たかったです。



それから間もなくして、Oさんは亡くなりました。後日、娘さんから絵葉書をいただきました。そこには娘さんがOさんとの日常を描いた絵と、私に向けた言葉が書かれています。『横田さんへ 母は貴方の笑顔が大好きでした。これからも介護の仕事を頑張ってください。』落ち込んだとき、悩んだとき、

いつもこの葉書を見返しています。Oさんと関わった時間や娘さんからいただいた絵葉書は、今も私の大切な宝物です。

Oさんとの出会いを大切に、今関わっている利用者さんやこれから出会う利用者さんにも『あなたに出会えて良かった』と思ってもらえるような介護福祉士を目指していきます。何ができるか日々考えながら、利用者さんと関わっていききたいです。

●わっちはびびりと言ってびびるね

埼玉協同病院 回復期リハビリテーション病棟

介護福祉士

関根 香澄



入院している患者さんの多くは、リハビリの効果もあり、介護が必要な状態から、一部介助、見守り、自立へと日々生活の動作が変化していきます。病棟で働く介護職員は、他職種と情報を共有し、連携をとりながら患者さんの状態の変化に応じて、生活全般に関わっていきます。

入職して3ヶ月が過ぎた頃、風呂場へお誘いすると、「忙しい」「体調が悪い」「嫌だ」と入浴を拒み続ける患者さんがいました。「またアンタかつっ！」と語気を荒げ、試行錯誤してなんとか脱衣所へお連れしても、なかなか服を脱ぐ気配はありません。寒くないようにバスタオルをかけてみたり、脱衣所ではなく、暖かい浴室にご案内したり、他の職員と連携し、人の出入りを最小限に控えたりと、その時々でとにかく色々試していました。そして患者さんと接していくうちに入浴拒否をする理由も少しずつわかるようになりました。

誰でも裸を見られるのには抵抗があります。いくら見守りが必要だからといって、すぐそばに立たれてあれこれ声かけされるのは不愉快ですしありません。そこで私は会話を重視しました。行動を制するのではなく相手に合わせるよう心がけました。例えば、私たちの「入浴習慣」は、頭や体をシャワーで洗い流します。しかし、その患者さんは風呂桶を使って流します。たしかに、前

傾になりすぎて転倒の危険性が出てきますが、いつでも支えられるような位置からほんの少しお手伝いをしたり、私も風呂桶を使って背中を流すことで、「嫌だ」が「ありがとう」へ変化していきました。

介護する側の勝手な価値観を押しつけるのではなく、今までの生活習慣を尊重することの大切さを改めて実感しました。患者さんも文句を言いたくて言っているわけではありません。その証拠に入浴後には必ず「さっきはひどいこと言ってごめんね」「気持ち良かったよ」「ありがとう」と声をかけてくれます。

そして、退院の前日、リハビリ中にも関わらず、「明日家に帰ることになった。本当にお世話になったね。ありがとう！」と握手をしに来ていただきました。最後の最後まで奮闘は続きましたが、逃げずに向き合い続けて良かったです。

日々の業務に追われてくると、気づかないうちに自分本位の介護をしてしまいがちです。患者主体の介護が常にできるよう、努力していこうと思います。そして、笑顔をとくさん引き出せるよう、心にゆとりを持ち、一人一人の個性を大切にして向き合っていきたいと思います。

●私が大切にしている介護職の基本姿勢

介護付有料老人ホーム桂の樹

介護福祉士

佐々木 貴康



介護職として働き15年が経ちました。

これまでたくさんの利用者さんとの出会い、思い出があります。

その中で今でも心に残っている、女性の利用者さんとのエピソードを紹介します。

Aさんは言語障害があり、言葉が出にくいため、コミュニケーションを取ることが難しい方でした。そのため、他の利用者さんとの関わりがもてずに、ひとりで過ごしている姿をよくみかけていました。しかし家族が来るたびに見せるAさんの笑顔はとても素敵でした。

Aさんとお会ったその当初、私は就職したばかりで、言語障害のある利用者さんとのようにコミュニケーションをとっていいかわかりませんでした。慣れないなか先輩に教えてもらいながら、身振り・手振りを交えコミュニケーションをとっていきました。しかし排泄介助の声かけは、私の対応に左右に顔を振られ、少し怒った口調になる事が多く、上手くいっていないと感じていました。

ある日、先輩職員に「利用者さんと話す時は、目線を合わせて」「話をしている時、相手の口元の動きを観察していると、その利用者さんの言葉が

わかるよ」とアドバイスを受けました。これまで私はAさんの頭上から話しかけていました。しかし車椅子に乗っているAさんと目線を合わす・口元の動きを観察するためには、膝を曲げ、同じ視線にする必要がある事がわかりました。

早速やってみると、少しずつですが言葉が聞き取れるようになりました。

私が方法を変えたことでAさんと徐々にコミュニケーションが取れるようになり、今まで上手いかなかった排泄の介助にスムーズに入らせてもらえるようになりました。

そして私にも、ご家族にみせている笑顔で接してくれるようになり、今でもとても嬉しかったのを覚えています。

私はAさんとの出会いで、介護職としての大切な基本姿勢、同じ視線で相手の気持ちを共感する大切さを学ぶことができました。

これからもこの基本姿勢を大切にし、利用者さんの言葉や思いを引き出すことができるように頑張っていきたいです。

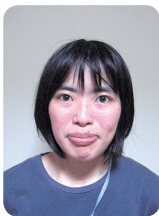


●人と関わる大切さ

老人保健施設みぬま

介護職

横山 奈美



私はみぬまに入職して2年半になります。

働くまでは、介護の経験もなく高齢者とお話をする機会がなかったため、右も左も全く分からない状態で、この仕事を長く続けることができるか不安な気持ちでいっぱいでした。

最初は、介助の仕方と仕事を覚えるのに必死で、どんな話をすればよいのか分からず、話すことに対して怖くなってしまい、自分から進んで利用者さんとコミュニケーションをとることができませんでした。また、介助も技術が未熟で、移乗する際に利用者さんの身体に負担をかけないように行おうとしたら、自分自身の腰を痛めてしまった時もありました。

利用者さんを怒らせてしまったり、自分の考えていた通りに行かなかった時は悩んだりしました。そのたびに、自分に介護の仕事は向いてるのだろうかと不安に思うことがありました。

それでも自分に何ができるかと考えた時に、まずは利用者さんの顔と名前を覚える、挨拶や身近なことについてお話をする、お願いされた際は自分が行なえる範囲で行なうなどを中心に自分から積極的に行なっていました。

最近の利用者さんから「最初の頃はどうだろうって思っていたけど、あなた

最近動けるようになったじゃない」「おはよう、今日もよろしく」と一言声をかけて頂くようになり嬉しく感じています。

介護の仕事は一般的にはどうしても「大変」というイメージがあります。私自身も大変だと感じる時もあります。

しかし今は、それ以上に介護は人と繋がりを持つことができる、やりがいある仕事だと感じます。それは、その方の生活に関わる仕事だからです。利用者さんにとって自宅にかえるまでは、ここの施設が家になります。

その方々がどうしたら安心して施設で過ごすことができるのか、利用者さんの家族、周りの方、他の職種の方と繋がりを持ち、考えていく必要があります。

中には施設生活の中で人生の最期を迎える方もいます。とても辛く悲しいことではありますが、人生の最期に関わることはこの仕事をしないとなかなかできない経験だと思います。介護の仕事に自信をもち、尊い人生の歩み、人と人との繋がりを大事にしこれからも介護の仕事に励んでいきたいと思っています。

●輝く笑顔の縁の下の力持ち

介護老人保健施設みぬま

通所リハビリ

佐藤 初美



「ありがとう…嬉しい。」デイケアを利用し始めて、最初は消極的だったAさんだったのですが、職員や他の利用者さんとの関係性ができて徐々に慣れてきた頃、ふと話をしていた時にそんな言葉を聞くことができました。さらに、「くす玉を作ってみたい。こんなきれいな作れたらうれしいな…。やってみたい。」という意欲もでてきました。この想いをどうしても叶えたい！と思い、翌週からくす玉作りをはじめました。Aさんは、集中力がうまく続かず、折り紙の折り方が分からず、挫折しそうになる時もありました。折り方を紙に貼り付けて、見れば分かるようにすると、少しずつですが折ることができるようになってきました。もしかしたら、くす玉作りが嫌になっっていないか、負担に感じていないかと心の中では心配していましたが、声をかけると「やりたい」と返答が返ってきました。

何回かやっていくうちに、周りの人たちも加わり、あれやこれやと話をしながら完成を目指し、無事に完成させることができました。完成した当日に私自身はいなかったため、後日、「一緒にできなくてごめんなさい」と伝えたところ、「素敵なのができたのよ。お嫁さんもとても喜んでくれたし、自分の部屋に飾っているよ。本当に素敵。初めはできるか不安だったけど、完成

できて一緒にやってくれてありがとう…嬉しい。」と笑顔で話してくれました。家族にほめられることが自信にも繋がっているようでした。

声を聴く・話すことは大切で、普段感じていることを言葉にしないAさんが、心の気持ちを声にしてくれたことに、私自身とても嬉しく感じています。もっと利用者さんの話を聴いて、持っている力を引き出していきたいと思っています。

そして、今回のくす玉作りを通して、Aさんから「ありがとう」という言葉と共に、たくさんさんの笑顔と元気をもらいました。人が何が目標に向かって取り組む姿は、何歳になっても輝いていて、楽しみをもつことは大切なことです。「その人の笑顔を引き出すことの原動力になれた。」と大きな達成感が湧いて、嬉しい気持ちになりました。目標を持ち、その過程を大切にし、今後も利用者さんの良さを引き出していきたいと思います。少しでも自信に繋がれば…と思い、チャレンジする気持ちをまた持つてもらえたらと思います。自分が利用者さんにかけた言葉が、心に響いて、それがやる気や意欲に繋がっていることに誇りとやりがいを感じています。

周りの人たちも一緒に挑戦してくれたことにも嬉しさを感じました。小さなことかもしれないけど、「人の輝く姿を引き出す手助けができた」ということが、介護の仕事をやっていて良かったと心が温かくなります。

これからも、ひとつひとつの言葉や表情を見逃さず、「どついたら、もっとこの人の意欲や、心からの笑顔をみられるのかな」と考えていきたいです。

●「その人らしく」を応援できた

ケアセンター かもがわ
訪問看護

島村 亜希子・渡辺 雅子



終末期の利用者さんの依頼がありました。ご本人には残された時間は伝えていませんでしたが、「大好きな我が家で過ごしたい。自分で建てた家だから…」と、在宅療養を希望されました。

先日、利用者さんから「自動車を運転して出かけた」との発言。

この方は、ご自分で地図をもってどこへでも出かけられ、定年退職されてからの外出を楽しみにしていました。

しかし病状的に時間がなく、ましてや運転は飲んでいる薬から考えても無理でしたので、最善の方法を検討しました。

訪問した看護師より「お子さんに運転してもらって連れて行ってもらえないかしら？」と提案。

利用者さんは「いやだ」「車がダメなら電動自転車、シルバーカーだ!!」とにかく人の世話になりたくない。自分で運転したい。」

主治医も反対、ご家族は心配…。でも時間が残っていないので、なんとか希望を叶えたい訪問看護師。

そうしているうちに、自ら点滴を持って自転車に乗り、出かけようとして、妻ともみ合いになりました。なんとか制止はできましたが、妻から「どうにか

夫の思いを叶えてあげられないか？」と相談がきました。

訪問看護スタッフは考えました：「電動車椅子はどうか…？」という提案に至り、主治医に相談しました。主治医は、最初は反対でしたが、強い利用者さんの希望に共感が得られ了承をいただくことができました。次に力を貸してくれたのがケアマネジャーでした。

こうして無事に電動車椅子の手配ができたのです。

初めての運転の日、昔電車の整備士だったこともあり、操作はすぐに覚えられました。そしてケアマネジャーや訪問看護師、理学療法士、福祉用具の担当者、ご家族皆が見守る中、歩道を電動車椅子で自ら運転しました。

なぜ病を押してまで外に出たかったのか…ご本人にはやりたいことがありました。病気で好きなものが食べられなくなった状態ではありましたが、家族やお世話になった私たちを連れて、週末にお寿司を振る舞いたかった、お礼方々、自分も食べた気になりましたと話してくださいました。

とても満足そうに、しっかりと運転されていた姿が印象的でした。

その3日後、安らかな眠りにつかれました。ご家族から「病院を退院して在宅での療養には不安がありました。でも、忙しさを感じさせない訪問看護に支えていただき感謝をしています。わがままを聞いてくださりありがとうございます」と言葉を送りました。

医師・訪問看護師やヘルパー、セラピスト、ケアマネジャー、福祉用具担当者等、地域で活躍するさまざまな職種と連携し、奮闘し、いっしょに笑ったり、泣いたり、利用者さんに寄り添って日々頑張っています。

「ありがとう」の声が嬉しくて…介護を続けられてきた

秩父生協病院 3階療養病棟

介護福祉士

増田 恵子



誰かの役に立ちたいとこの仕事に就き早23年経過。

介護を始めたときは看護助手として知識もなく看護師と協力をして褥瘡（床ずれ）の処置を手伝ってきました。当時毎日患者さんの処置を見ていた私は褥瘡（床ずれ）の処置を手伝うプロとも言われたものでした。（それを知る人は今ではほとんどおりませんが…）

介護の仕事をしているうちに「これなら私もできる」と自信もついて、K町の病院で働きながらヘルパー2級を取得。

2000年K町からA町へ病院が移転。介護保険制度開始とともに初めて介護福祉士2名が入職。次いで入職する職員が増えていきました。

若い介護福祉士は大学や専門学校で学んできたことから、私たちヘルパー1・2級とはレベルが違う。専門用語を言われても分からないこともありました。

5人の仲間が若い介護福祉士に近づこう、介護の力量を上げようと介護福祉士を目指しました。当時のリハビリ主任は本業の仕事の合間に私たちに学習会を開いてくれたり、各自が問題集を持ち寄り、コピーして何度も問題集を解くなどしました。また休みには集まれる人同士で学び合い、楽しみながら励まし

ながら勉強会を行いました。試験前日には雪が降ったら大変だとみんなでホテルに前泊。（緊張の中にも楽しみがありました）

そして、無事全員が介護福祉士の国家試験に合格することができました。

それからは患者さんのために何ができるかなど仕事が終わった後でもお酒を飲みながら話した日々を思い出します。

療養病棟は介護福祉士も増え、介護という職種も他職種から認識されるようになりました。当時、病棟をひっぱってくれた先輩職員のIさんが介護福祉士という立場や役割を確立したと私は思っています。

当時は移動の動作が自立している方も多く、身体の介護は多くありませんでした。しかし現在は、認知症の方や身体の介護が必要な方も多く、病院に求められる役割もかわってきています。来年度には介護型療養病棟が廃止となり、医療型療養病棟に転換となります。

寝たきり、看取り、点滴の必要な患者さんなど医療が必要な方が多くなることとが予測されます。私たち介護職も医療の知識を高めていく必要があります。同時に私たち介護職は患者さんの一番そばにいます。

何を提供できるか？ どうすれば喜んでもらえるかを考えながら、心のケアもできる介護福祉士でありたいと思います。

●編集後記

事例を提出された方々、本当にすばらしいと思います。同じ思い、同じ悩みを感じながら、自事業の利用者様の満足を獲得していこうと思います。

大井協同診療所 通所リハビリテーション 介護福祉士 山本 達夫

事例集の作成を通して、たくさんの方の介護の誇り、やりがいを知ることができました。改めてとても素敵な仕事に携われていることを感じる事ができました。

介護老人保健施設みぬま 介護福祉士 眞鍋 阿希子

事例集作成を10年ぶりに取り組み、月日経っても大切にしてきたものに変わりがなかった事にきがつきました。志をもった職員と働けることを誇りに思います。

介護老人保健施設さんとも 介護福祉士 市村 聡子

介護はマイナスなイメージが世間で聞かれています、この事例集の中には様々な笑顔や涙の話が含まれています。介護への想いが、一人でも多くの方に伝わりますように。

秩父生協病院 介護福祉士 中西 康博

介護の制度をよくする運動づくりの立場から、委員会に参加しています。皆さんの素晴らしい実践を多くの人に知っていただき、安心して働き続けられる介護現場にしていきたいと思います。

本部けんこう文化部 まちづくり推進課 小野 民外里

10年ほど前に事例集を作成した際、その時にいろいろと考えを巡らせた内容は、いまでも自分の大切な介護の原点になっています。

ケアステーションうらしん(訪問介護) 介護福祉士 松島 豊

現場の職員の想いがつまった1冊になっています。多くの方々に手に取っていただき、「介護はとても素敵な仕事」だと感じていただければ幸いです。現場で働く職員の方々には、同じ志を持って働いている仲間がこんなにもたくさんいる、ということを改めて感じていただければと思います。

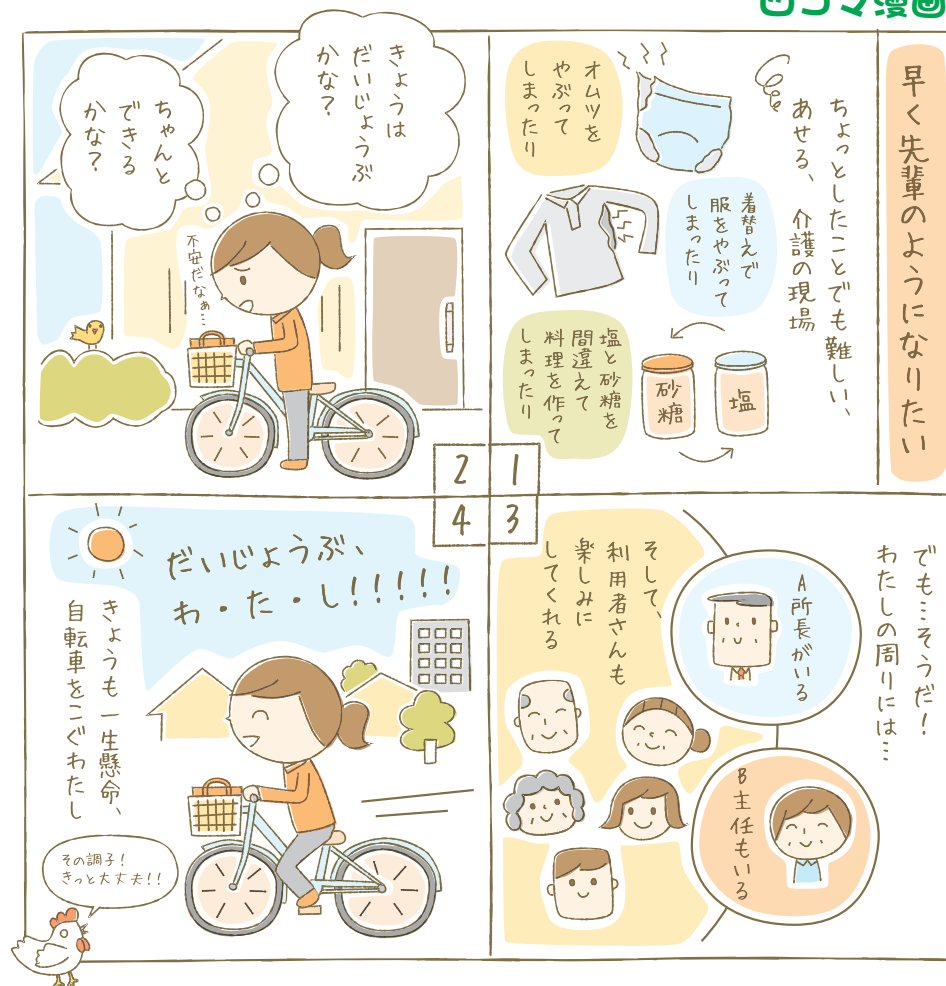
介護老人保健施設さんとも 介護福祉士 成富 綾香

利用者様やご家族様に、笑顔がみられたときにこの仕事をしていて良かったと感じることが出来ます。やりがい事例集には、そんな職員の思いが沢山込められています。

ケアセンターきょうどう 介護支援専門員 渡邊 真弓

皆さんの貴重で素敵な経験に感動しました。同じ医療生協さいたまの介護職として働けている事を誇りに思います。

埼玉協同病院 回復期リハビリ病棟 介護福祉士 中村 浩章





あなたに出逢えてよかった ～介護のやりがい事例集 Vol.1～

2018年4月1日 初版発行

発行所 医療生協さいたま生活協同組合 介護職部会

〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂1317
TEL.048-294-6111(代) FAX.048-294-1490
<http://www.mcp-saitama.or.jp/>

四コママンガ 加藤陽子

印刷・製本 株式会社ダーツ

転載・転写されるときは事前にご連絡ください。